

## 青の季節

中津市長 奥塚 正典

新年度を迎えました。入学式や入社式が終わり、フレッシュな若人が真新しい制服やスーツで行き交います。5月からは新元号「令和」、なにかスタートする清新さを感じます。

若さを色で表現するとすれば、「青」でしょうか。第一に青春と言います。若人はもちろん何歳になっても、この言葉はそれぞれの胸に去来する思い出や今を生きようとするエネルギーにつながる気がします。

青は中津にはなじみが深い色です。まずは青の洞門、地名が青地区。山国川にあふれる清流、渓谷を彩る木々の緑、見上げれば雲一つないブルースカイ。季節は桜が終わり新緑、緑と青はイメージ的に近いですね。

そして間もなく青の洞門対岸一帯に出現するのがネモフィラの青。地元をはじめ、企業、ボランティア団体の皆さんが水田に種をまき草取りをして育て上げてくれます。大分トリニータのユニフォームも青ですが、その胸マークになっている中津の自動車メーカーも、昨年当地で食とウォーキングを企画した青がイメージカラーの航空会社もネモフィラづくりに参加しています。

ところで、青の洞門と言えば、菊池寛の小説「恩讐の彼方に」。江戸時代、険しい渓谷の交通難所に30年もかかってノミでトンネルを開削した僧禅海が主人公です。著者が30歳そこそこの若さでの代表作。40代より若い人に聞くと結構知らない人が多いようです。是非、改めて多くの方に読んでいただきたいものです。青の洞門の歴史と物語を知り、青がさらに深みのある青になります。そして中津がもっと好きになりますよ。



ネモフィラの青

自然山河の美しさに恵まれた中津、まさに「青の季節」を迎えます。スタートを切ったすべての人が豊かな青春を送られんことを切に祈ります。

「君は川流を汲め、我は薪を拾わん(広瀬淡窓の漢詩)」。

よき友と共に励み夢に向かって進め！